



芭蕉翁文集

中

5  
687  
2



卷之三

真如之行

...

...

...

...

...

...

...

...

...

利門  
號 687  
卷 2

東京市立區大久保  
餘丁町百拾貳番地  
坪内雄藏

芭蕉翁文集卷之二

真羽記行

昌福  
昌福  
昌福

月日百代の区宮ありてゆくも年々又旅人之  
松のうゝみ生涯をうぐ馬は口とてて去成  
むらうも然り日々揺りて揺を極と守古人も  
多く揺よ死とるあり平もいつきは年々より  
片雲の風よさそつれく漂泊の心ひやまは  
海濱よけすも去年の秋江上乃破屋よ樹の  
古葉を拂く潮々年々も言事とる。哉乃

明治三十二年十一月五日

坪内雄藏氏寄贈



雲より白河は雲城んとそらかこのそらよつて  
 心をうつせ及祖神の招きひひくを物もふ  
 つるは役引の旗をほくも蓋は法付つてと里よ  
 灸すもよる松島の月先んよかるとてはる方  
 人は漂りて松島を別楚を移るよ  
 草は産も信りて代を籠の家  
 面は勺を唇の板よりけ並やひも未は七日暖  
 の空雁くもよる月には有ぬめて光かきぬら  
 もはるも不二の峰一處よこえて上井谷中の

神話三十一卷十一頁上

花の梢まといひをくくはほくむつ  
 其の音よりつとひて船よ宗も送る手はといふ  
 ありて船をけりぬい前途二千甲の心ひ物  
 ふさうもく初のたまはよ離れの洞をそく

けきや多しや魚の目も  
 是を去るの初とてけりた程すまは人く  
 途中よ立あひひく後うけのえゆまていと見  
 送りありて六とて元禄二とせよや奥羽長  
 途のけ柳只は初よあひ立て吳天よ白髪

恨をいふぬといふとも耳はぬれていぢく目も  
えぬ境も生て死つくと定かき杉の葉をうけ  
て日ぬく葉加とよ富よたとり若より瘦  
骨の肩よかまる物先くもむ只才すくもを  
出立侍を浅子つぬいぬのふを死ゆつゝ菊具  
葉子のねひいふいさうかゝ死骸おとくさるい  
さすふお控をくくつて臨次の状となれるこゝそ  
わらふるも

室のいふよ侍の日記 若きりいさく世神

あはれ花さくや姫の神と申て富士一峰にさす  
高き入を焼くふちうひは中よ出く出んと言  
せぬぬのいさう室のいふと申又燈を渡り  
つゝ侍もいけ溜るいお六の長うといふ鳥を捕り  
縁記のむい世よつゝ

世日日光山の標よはるいさうの云ける中  
家名を佛おたふつと云ふ山をむひと申る  
故子人新い中侍もまう一木の村は花もうち  
とけて侍のいさうといひぬる仏の湯世を土よ



依る悪賢山の句あり夜更の二字力ありて  
まご由二十余町山ををりて流あり岩洞の頂  
より花流しを百尺千石の碧潭に落し岩室  
より身をいそめ入る流の妻より花水うらみの  
流と申傳へ侍るなり

磐崎の流よりや暮る初

磐崎の悪くひと云ふ初の人あきいそより流  
紙よりして悪色をりんとす<sup>ま</sup>庭より村をえ  
りけて流より雨降日笠の農夫のあふ一水を借て

ぬきハ又賢中をりまふ流の馬あり草薙ふ  
そのよふけきよなる流まといえりけりふ流け  
きぬあをあらぬいそむやとれもひけり<sup>ひ</sup>縦横  
より別まてらぬ<sup>り</sup>ま振人の流きたる一人の中  
う流ぬいの馬はとむらあう<sup>り</sup>馬をた<sup>り</sup>ると  
か<sup>ひ</sup>ぬちい<sup>り</sup>たりの二人の流をひてけしる  
独い<sup>り</sup>小娘あ<sup>り</sup>か<sup>り</sup>のいと云ふおぬ名のせり  
うらむけきい

かさねといひて<sup>り</sup>お子の名をい<sup>り</sup> 首 良

如て人更にふれいしむを執垂よ治つけそ  
るを好しぬ

鳥羽の敏代浄坊寺何りの方よ昔に心ひくけぬ  
何りの心ひ日お清つけてそ才枕草かそ  
いふ終夕つよめ訪ひ自の心も休ひて親屬  
の方よも招と日をつらまにむと日郊外よ遊遊  
しと大進よの心を一了して好原の藤系をわ  
けと玉藻前の古墳をうよまより八幡よ治  
と市麻の的を射しとそあして我國長神

西の樓とちかめしと此神社も侍りとも感恋  
味頻りふえそそ昔は枕草宅よ時々修験光明  
寺といふ何りそよ招とくし若堂を洋す

麦山よ是結をぬむそ途の好  
當国を岸寺の奥を佛頂和尚山居の心あり  
登三橋のみこよあそぬまの居  
むすあもら中一ふかきそ

と松の炭して若よ出付侍りといつそやそ  
その心見んとそ居ちよ杖を束い人くすんそ

修よりさかひなき人多くたのたおさひきて  
元は彼林より山へたぐ行り景色あり谷道  
をよ松杉よく蒼蒼なりて年月の天を程き  
十系その木橋を渡り山門より入扱彼林より  
の宿りやと後の山よよち登れ石上の小庵 石  
窟よりむすひくけり妙禅師の死異法を法師  
の石室をえりつて

本家も蒼々破々の麦本立  
と名取の一句を根子沙師一是より殺生をよ

ゆく館代より馬あき送りゆく口符のわのこ  
経丹ゆきよと乞乞一死車を平と伝るその  
うきと

野を横よ馬をよむけよ甘き  
殺生石の温泉の出る山陰ふあり石の毒草い  
ちと亡は蜂味はねひ赤砂の色はえつぬを  
重り死す又清き流る水柳の葉種の内を  
有て田の畔よ流るけ雨の露も戸詔某のけ  
柳をよせよやふと折くよぬる多しあふり



長途のころみ身んつれ且ハ風京子魂う  
こま懐田中 揚を断る たのしく 志うあひ  
めらうさ次

風流のけめやおくの田植唄

せりよ誠んも信ふあゝ語まハ根才三とつば  
けて三巻とあゝぬ此宿のかきとらふ大さ  
ゆる粟は本信をたのめて世をいゝと一僧あり  
椽をくまふ山もかくやく間よ覚る水ておよ  
お付侍るこそ詞

粟とつふ文字ハ西の本と書て西方浄土よ  
候り有と行基菩薩は一生杖も杖も  
この本を用ひ流ふとらや

世は人の足付ぬ花や新の粟

等窮り定を出る まじり お里中松皮の窟を駈きて  
あさう山を まじり このたのしみ活多りかつこ新ぬも  
やをうあはれいけまの字をむらうこといひあそ  
とんよ尋侍もともあや知る人あり活を  
きつぬ人よあひうつこしと尋らうとて日ハ

山の端よかきぬ二か松よりちよきふて馬塚  
の岩屋一尺一福高よ中なる明水い志のふり  
指の石を尋て志のふは早ふりおとら匠の  
小里よ石ま土を埋りりり星の音の来りそ  
ななるい昔い此山の上よ仰とて住まの人を麦  
葉をたらしめてけんを試侍るをふくにて此言よ  
つと落をい石の角下さぬよ伏しきうといふとも  
有しといふや

早苗とるふりや昔志のふ指

月の端はわづらを紙と紙の上といふ者よ山の  
依後座司う回詠いたりの山陰一里はくうあり  
飯塚の里結中と志を尋くりり丸山と云よ  
たけね高る是座司う回詠く柿ふ大石の詠ふと  
人の志もままうせと洞を流し又さういひの  
古寺よ一畝の石碑を流す中も二人の嫁り  
志り先急く女なれとも甲斐くしと名  
世よすえつるこもはるかと袂をぬりぬ陸後の  
石碑も志記よあはれよ入て葉を乞ひ愛ふ

義經の古刀無差の笈を止し付あし

笈も古刀もあしこのまじり身懐

あしあしの中こそその古飯塚よとある温厚のまじり  
湯よ入る宿をかふちまよ是をまてあし  
多あし灯もふるまじりその火のけよ森を  
まじりけり外もあし入る雷鳴あしまじり  
外も上より漏る飯塚よせうりてあし  
まじりあしを消入しよあし經水のまじり  
あし又詠立ぬ程水の余波んまじり馬

かき葉折の驛よ出る遠ありけまをうえ  
初も病は来りといと霧籠道土のけ柳  
まじり葉の記意まじり死あし道土の今  
ありとまじり柳をまじり流能横よあし  
大木戸をまじり流指白石の城をまじり  
平入まじり後中ねまじり方の塚あし  
とまじりまじりまじりまじり山際の甲を  
まじりまじりまじりまじり祖神の社あし  
ありとまじりまじりまじりまじり今あし

才骨も侍れ、余所かゝる叱たりと云ふ事痛  
き為しわ月而は折よしとせり

三島、二つ六月のぬくさ

岩渚やとる

武隈の松よとて目差らん此はすも根土際  
より二木よつらねて昔は海共りなと志  
先能因法後かりひ出むり陸奥もあてり  
しくけ木を伐と名倉川の松杭よせり  
事かゝあねさあや松は此は此路もあ

詠より代く、何の伐あり、極絶かきと  
安よとね千葉のかちとて目出せり  
松の今、丸よあん侍

武隈の松名せ中と進さるる 挙白  
といふの、錢かき、せりけき

梅より松、二木を三月哉

名倉川を海へ仙意子入、何れも日や  
宿をりともて、何れも子、安よ画工加  
と云者あり、研んあり、何れも、知る人よ

け老年の<sup>さく</sup>は<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ぬ名と<sup>ら</sup>を考<sup>え</sup>は<sup>れ</sup>ぬ  
とて一日東門す宮城の秋<sup>の</sup>葉<sup>り</sup>あ<sup>ひ</sup>て秋  
の<sup>葉</sup>色<sup>を</sup>お<sup>り</sup>ひ<sup>や</sup>を<sup>ら</sup>く玉田よ<sup>う</sup>種<sup>は</sup>は<sup>ら</sup>く<sup>る</sup>葉<sup>の</sup>  
阿<sup>を</sup>ひ<sup>の</sup>葉<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>日<sup>の</sup>影<sup>も</sup>り<sup>ぬ</sup>松<sup>の</sup>木<sup>も</sup>入<sup>る</sup>  
葉<sup>を</sup>木<sup>の</sup>下<sup>の</sup>と<sup>ら</sup>ふ<sup>も</sup>昔<sup>も</sup>か<sup>く</sup>葉<sup>の</sup>深<sup>く</sup>も<sup>も</sup>  
こ<sup>を</sup>み<sup>さ</sup>ふ<sup>ら</sup>ひ<sup>こ</sup>か<sup>さ</sup>と<sup>い</sup>誦<sup>と</sup>も<sup>茶</sup>師<sup>堂</sup>天<sup>神</sup>  
の<sup>社</sup>の<sup>り</sup>深<sup>く</sup>も<sup>日</sup>の<sup>影</sup>ぬ<sup>松</sup>島<sup>の</sup>深<sup>く</sup>ぬ<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>  
画<sup>を</sup>書<sup>て</sup>送<sup>る</sup>且<sup>海</sup>の<sup>深</sup>流<sup>つ</sup>け<sup>る</sup>葉<sup>の</sup>誌<sup>二</sup>足<sup>一</sup>  
饒<sup>す</sup>さ<sup>れ</sup>い<sup>く</sup>そ<sup>風</sup>流<sup>る</sup>志<sup>れ</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>て

そ<sup>を</sup>実<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>ら</sup>し<sup>す</sup>り<sup>て</sup>一<sup>の</sup>葉<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>ら</sup>し<sup>す</sup>り<sup>て</sup>  
阿<sup>の</sup>や<sup>め</sup>村<sup>は</sup>足<sup>の</sup>よ<sup>い</sup>す<sup>ら</sup>ん<sup>葉</sup>誌<sup>の</sup>流<sup>の</sup>  
か<sup>の</sup>流<sup>の</sup>よ<sup>う</sup>せ<sup>と</sup>た<sup>と</sup>り<sup>け</sup>い<sup>た</sup>く<sup>の</sup>神<sup>の</sup>足<sup>乃</sup>  
山<sup>の</sup>流<sup>の</sup>十<sup>の</sup>符<sup>の</sup>葉<sup>あり</sup>今<sup>も</sup>年<sup>も</sup>十<sup>の</sup>符<sup>の</sup>葉<sup>あり</sup>  
葉<sup>を</sup>潤<sup>く</sup>國<sup>の</sup>ち<sup>よ</sup>献<sup>す</sup>く<sup>い</sup>え<sup>る</sup>

壺碑

市川村多賀城<sup>の</sup>有<sup>る</sup>

つ<sup>の</sup>不<sup>の</sup>名<sup>の</sup>よ<sup>う</sup>い<sup>ふ</sup>言<sup>の</sup>六<sup>尺</sup>余<sup>横</sup>を<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>昔</sup>を<sup>も</sup>  
穿<sup>て</sup>て<sup>文</sup>字<sup>を</sup>出<sup>る</sup>り<sup>四</sup>維<sup>國</sup>界<sup>の</sup>殺<sup>を</sup>を<sup>る</sup>る<sup>也</sup>  
此<sup>城</sup>神<sup>龜</sup>元<sup>年</sup>按<sup>察</sup>使<sup>流</sup>古<sup>府</sup>將<sup>軍</sup>大<sup>野</sup>

胡信東人の所置あり天平宝字六年冬識  
東海東山節度使同知軍憲美於信猶於  
造して十二月朔日とあり聖武皇帝の少時  
の事なりむりより詠かきせらるる余まづる事  
詠傳ふとも山崩き川流を及改り石の埋  
て土よかくぬれおきてあまきおれの時うつり  
代變してこそ詠かきせらるる事なり  
しうりて疑ふさ千載の記念今眼前に古人の  
心を覚す所神の一徳存命の悦び器磁乃

音もを忘れず洞も流る中へまより聖田乃  
玉川沖の名を尋ふ末の松山の寺を造て末松  
山といふ松のけひくしふ巻くめくしを  
りりし松をつらぬる契りの末も流る所の事  
とありはも増しを塩か戸の浦よ入おの鐘を交  
お月るの空研晴て夕日お出り籠て島も  
程ちりし雲の小舟これつきてきわつりあり  
よはふてりけりとも詠かきせらるる事なり  
急くこそお目盲法師の琵琶をふりて奏す

福徳と云りたをかゝる平家もあはれ哉あし  
あはれなるひさる潤子お上り花をよう一  
けきこふふまゝの送風忘れらるる  
津橋よ是は早朝陰寛の津子諸國を身  
真とくは宮様ふとく新椽とくもやうふ  
石の階九段より朝日影玉垣に輝きかゝる  
果て土の境まで神君あゝたよまゝはまゝ  
吾國の風俗おれといふはけと神希も古き宝燈  
有かひの戸をたぬり文治三年和泉三良

寄をとありぬ百年朱の侍今日の希ようかひ  
とそらよ海に渠ハ勇義忠存の士く佳名  
今よいまゝとて志さつたつとてあし誅人能  
及を勤義をさるる一もあはれ是子従ふといり  
日既よ年ふをく船をかゝる松島よ海をさる  
二里解雄島乃破りつと  
押さつとつとよはれ松島ハ扶桑才一の好風あや  
凡河原西湖を袖は東菊より海を入れて江の中  
三里湘江の流をさるる海くくの殺をさるる

歌すのりの天を括ふまゝの波は旬富あるハ  
二重ふかさあり二重よきてたふわれちよつ  
かゝ負る何の抱ふあま思孫夢するうそ一松の  
海はあやふ枝葉の風よ吹るあまを屈曲自ら  
ためらうつこゝとて色色盲然として美人の  
顔を粧ふちよやふ神のまう大山すこる  
かゝるまゝや造化のまゝの人の筆  
そらひ詞をつくさん  
雄島り破れ地つたて海よ出る鳴ありま居

禪師の別室は臨座禪石ありつりお松の由縁  
よせをいふ人も稀く一とん侍りて落穂松をま  
うらふありまの草は居閑よ候ありいりゆる人  
もあまをいふあま先ありく一とんあかど  
月海ようつろひて意の極まてあまむむ海上よ  
帰るを宿を求まて忘をひくた二階を作りて  
風雪の中よ操練するをあまをいふあま  
地ををくま

松島や鶴の身をかき時を  
いさるら

平八口を穿て成らんとしてい縁るまは日廣を  
前より時素堂松島の侍あり系安適松うらう  
しぬの相弁を縁る縁を縁てこひの友とす  
且松風湯子う系白あり

十一日瑞岩寺より信尚寺二十二世世は昔志堅の  
平八所出ありて入唐帰朝の後果すその  
好まざる店祥海の徳化に依り七堂覆改りて  
金堂莊嚴を輝佛土米乾の大伽藍といふれ  
るらり彼見仏堂のまは河ありやとあるなり

十二日平和泉とんごりの松法寺え乃橋  
たもと支傳て人臨栴よ紺允葛菟の法うふ色  
そまともわらず流子流りたるえて石の巻と云  
流子出六のの花咲とよきてなりける金華山  
海上よりそく一殺百法也船入江中つと人  
地を争ひて實法はつり立つけあつとひうけ  
新なるも事わう好と富うるとすれとまよ  
中かかす人あし漸まてた小家よつねをひりて  
河くれはまてあぬまはひり袖乃りきり

尾ふちの牧まはらさうさうさあふんくを  
なる堤をりいゆきとほよそく戸印と  
しあふ一宿して平泉よむるこる女余里らち  
三代の榮耀一睡の中ありて大川の流ハ一里こま  
たより秀衛の流ハ田里よめり金難はたこ  
形を流す先言館よはむま北上川南流より  
流す大川あり衣川の初泉の城をめぐりて言  
彼の下めり大川よ流入康衛ふる田流ハ衣の関  
を停る南流口をさし望め妻を防くとえり

備も我長すくひと世城よるも功名一時の羨  
となら國破れり山河りり城をめり草草  
み多りと三才交り時のうりまをふりて  
流し流りぬ

妻もや兵ともい夢の流  
舟の流よ兼扇こゆる白毛か 首 良

かの耳聲りきる二堂并帳子鏡堂ハ三将  
の像を安置す光堂ハ三代の棺を納め三首の  
仙を安置す七宝を失り珠の鹿風よ中を

四角新  
田

合の粒表雪は枯く既顔廢空虛の蓋と  
ありきをを四面新しき罪を覆て風雨凌  
野附千柔の記意といふこと

お月あつ降淡くや光堂

菊初花をよみたりそ忘名の里ふ泊る小馬崎  
み川の小橋をさぐるなるこは陽より尿管の園  
よかきとて出羽の園は誠人とすけは臨人稀  
お夕おあぬい異さふあ中やあはる漸片々  
雲を誠大山を眺むつる日既よる色けきこ

討人のおおえんうけし舎をりしむ三日風雨はれ  
くよふかき山中は還るあは

巻氣馬の尿するまらうり

あやしの云是より出羽の山は大山を信て道  
はさうあはこれとるあは討人をねそ誠つこ  
よしを中しつと云く人をたのむねい究  
竟のあおる取持をよみし一摺乃杖を携えん  
おしつう先よまてひりふふこそ必あやうき  
のあもらうり三日あはる幸きあひをあは

海よりみくわりありあやのなまは遠くは言ひあは  
とて一多なるをまはる本の下書きありあひて  
あひりりこゝを鑑よあはるん地して藤の中  
ふと分く水をわたりあまのつゆりひて乳よ  
つめられた汗を流し言上の底よ出つこり  
紫のちしおのこたえやうけた必不用の事有  
恙あり送りすゆきと使命しうとよるこ  
まふぬあまの物とるくのことあり  
尾を濡めし清風とよりのをきつぬことあり

富る者あれとも志し中々は都あも折く  
色ひと流石は揺り情をも知くまひ日びと  
めく世運のいさうさあくよりそわし侍る  
涼しき秋夜宿めし涼すま  
運出よらひやう下は善のわう  
眉掃をかりつけみこる移のむ  
望月する人の古代のすこた 曾良  
山形領よ三石寺とよ山寺あり慈覚大師の  
并基あり清浄の地あり一尺すなむ

よし大くのすむるは依り尾をほよりみて  
片しとる七里ゆく日ゆく苔の林の坊よ  
宿借をく山上の堂よなる岩よ巖をこまこ  
ゆと松栢年回土石をく苔滑よ岩上の  
院く庇を穿ておのきまつは岸をめぐり  
岩を這て佛堂を深し佳景寂寞とく  
心後ゆくは見えぬ

采々や岩よ志入蟬の聲

最上川清々と大石田と云およ日和をまつ

雲よ古き仇潜の種にほまきと云ねむむの昔  
を去るひ芦角一帯の心をせしけけささ  
さうり思て新古二層よ何ゆい  
道志のくす人けはくくくくくくくくくく  
ひ度り風温室をいまも

最上川のみちゆくまゆり山形を水上とす  
こてんまやふさふさおそくくくくくくく  
板交山の水を流る果は酒田の海よ入た石山  
産ひ羨みお中よ船をらすきふ橋つら

仙人堂  
ナリ

船舟といふかきし 白糸の流に青葉の蔭に  
ありて 仙人堂岸に臨み 立水これより 舟  
に乗りし

六月三日 雨をあつめし 雲上川

六月三日 羽鳥山より 泉司左衛門と云者を尋て  
別当代 舎元河原梨子 福子 菊谷の別院に  
会して 憐愍の情を 申す ありし せし

四日 本坊より 往 法真坊

有難や 雪をうけし 南谷

六日 檀況より 法尚山 昇輝 能除六師の 山より  
代りて 山より 志を 延喜式より 羽鳥里山の  
神社とあり 書字 志の字を 里山とある あり  
羽鳥里山を 中略して 羽鳥山とあり あり 出づ  
いんちも 鳥の 羽毛を け 固の 貫より 献する 風土記に  
傳へし せん 月山 湯殿を 合する 山とあり 寺あり 武江  
東殿より 属して 天台止観の 月明く くに 田舎 融通の  
法の 灯を けし して 僧坊棟を 修 法を  
勵し 靈山 異地の 強効人 貴し 且 凡る 靈山 あり

あつめて度あふと謂つて

八日 月山よりなる木海志あり月よりけ宝冠より  
改を包と強力と云ふのふ及ひくれと雪香山の  
の中より氷雪を踏くやるとこハ里さふ日  
の月のき雲より入るこ中よりあれ島絶ありて  
頂上より多ぬ日没る月影の無を交條を花  
とて外て雪を踏日出る雪消まハ湯殿より  
ふる谷の傍より液治小屋と云ふこ世國の液治  
君水を探る家より潔無くと、飯を打給ふ月山

と流を切る世より雲せと彼流泉より剣を俤  
さうや干将莫邪の昔よりきよ及の堪能の執  
海くぬと云ふれと岩より腰かけと志仰し体ふ  
かと三尺中ある梅のつぼとまハひくけさあり  
降積雪の下より堆れと春を忘れぬ遊梅の  
むのふさう好しと春天の梅を愛よりほらうめ  
の雪僧のふけ表もまよと心ひ出ると程まさうて  
是の中ありてけ山中の微細の者の法式とて  
化を守りつとを禁守りて筆を止めとあふさる

坊子河の河岩梨の需よよりて三山岩れの  
句々短冊に書

清くさや不日三日の羽鳥山

その峰いくつ霞さそ日清山

清く水ぬ湯殿よぬす袂く終

湯殿山清く心道のかきか 昔は

羽鳥を立く 鶴ヶ島は城下長山氏重河と云

り清くよの霧よむらさき水く沈清一巻ありた吉

もさりよ送りぬ川舟よ家く酒田の屋より清

削房石玉とよ医師のりくを者と守

あけふ山や吹浦くけて夕涼

君さる日を清く入まらる言上川

江山水清の风光教をそくそ象深よ方寸を責

酒田のみふとより東北の方山を紙破をりまひ

いさこを清くその係十里日影中かきくく

伊風志砂を吹上る藤嶺とくそ海の小島り

雪中ふ莫作してるも又奇くとをハるほり晴

色まらるねとく 雲の管危よ藤をいれく

水陸を結ぶと聖天能奏て朝日むすふさしり  
わとよ象浮子船をうりう先能同嶋よ舟を奏て  
三年出居の路を訪ふむらしの岸よ舟をうりうさ  
花の上あくと海あり橋のむ出西行法師の紀  
象を海守江よ水陵あり神功皇宮の御墓と  
いふ寺を干満珠まると云けあよ行幸あり事  
い中々安んじうぬるさしやけさ此方丈よ唐さ  
麓を控へ風景一服の中よそて菊よ多海馬を  
さへえと信う何さ江平有西いむやの関

流を限り東子堤を築き林田よ色よ冬冬  
海やよかす浪折入る所を伊うと云江の根  
横一里中伊松島よ色ひく又異う松島い笑よ  
うとく象浮い船さし一岸さよ出さしをさ  
つ地勢魂を大り中守さし似さし

象浮やるよ色磯の海よむ  
伊紙や鶴屋ぬまを海涼

象浮

象浮や科野何さし神象 昔古

蟹の家や戸板をまき夕涼 三枝の主人 休耳

岩上は雌鳩の巣をみる

波紋ぬ髪り有るやこころは葉 ちるら

酒田の余波日をそそぐ北陸原のせよそをそく  
のかりひ物をいそぐめく加賀は府と百二十里  
と芝嵐の扉をこゆは誠後の地は歩りを改  
め誠中の國一ぬりの関は出づける九日黒屋  
の骨は汗をかやまず病かこころを事を記さば  
五月や六日も春のあまの山

荒海や佐渡よよこふ天の河

そのハ祝志はあいらすたりし約たりかこ  
水玉一の難水を越し痛き侍れは花江よせ  
痛くもふ一層隔て面の方よあまの女のかう二人中  
とまゆ年をくらおのこは病もまうこ物泣き  
夕ハ誠後のま新ぼとくおの抱女ありし 伊勢  
兼あすもそけ里をかのこは送るあまのあま  
よ是もあまのあまはこあまのあまのあまの  
白浪のよする江よ身をこまのあまのあまの

世を歩ま〜うら〜と定めぬ心 幾人日この業園  
いくふ掛しと物云を空しく寐入〜行も旅もよ  
歌〜よむひ〜り情をぬ旅路のうさ金う  
是来あ〜あ〜く情ぬい入ん隠きあもあ路を  
あ〜ひゆん夜の上の少睡〜大急の意をうけて  
清涼とほせ多〜涙を流す不任の事あ〜情を  
も〜あ〜い〜あ〜い〜とあ〜う〜あ〜い〜只人の  
ひよまうを〜り〜神路の如後必急なる  
〜〜と旅で出づるあ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜

一家よ抱女も寐〜秋と月

昔よよかぬいあ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜  
教あ〜ぬ川をわ〜う〜那古と〜浦〜い〜て  
擔籠の履浪い喜あ〜い〜も初秋の衣と〜い〜  
りおを〜人よ尋ぬい〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜  
向の山陰よ入響の音あ〜い〜かすのあ〜い〜あ〜い〜  
〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜  
加賀のむ〜い〜入る

早稲のよ〜や分入あ〜い〜あ〜い〜

舟の志山よりかゝる谷を越へ金澤ハ七月  
中は六日あり安子大坂より無事高入何事  
と云ふは其れ其れをとりて一矢と云ふのハ  
世に不すけと名をわたりて安子世に高入の  
ゆりし去年の冬早世にゆりしその見  
追首を侵す

極も動け家匠をい秋の風

或作房よいこれいれ

秋涼し毎よむけや匠前子

途中吟

何れと日いつれかとも秋の風

小松よりよあをりて

志わしりさ名や小松より萩也

世に志田の神社は清き盛る甲流の切あり程昔  
源氏も屬きし時我相より清くも命をとりや実  
おも平士の志をりし目底より吹込し  
兼くし其の彫物命をとりし其流の形歩  
きりし其盛討死の後本首我仲親状よそ

此社を築くは侍より樋口次席の使たり  
ともすはあさう源記に見えたり

いざんやあ甲社下のいざんや

山中の温泉より程白根ヶ嶽迄を見たり  
ありたり山際より観音堂あり花山の法皇の  
十二所の光れ道さや多しと好大慈大徳の像を  
安垂し多しと那谷と名付たりや那智  
谷但の二字を分侍とそ奇石さあしよ古松  
植ありとと堂ふさし小堂岩の上より造りつけ

結構の土地なり

石山の石より句 秋の風

温泉より浴すその功有馬

ありととさるりの一糸はみとていさく小堂

彼ら又佐治をぬき治の真意を業のむり  
室よまりしは風雅な厚しやと治よぬ  
真徳のつくとあそ世りし功名のはこの  
一村判河の料をまひといふ今更むり  
といふありぬ



毎の如

流音屋子波をたふとせし

日を多ねたるゆかりの松 西行

世一首めく殺業をこころし一年をかろめい  
吾月の指をたふとせし 九思玉流寺の長老  
古き因あねい尋ねまゝ金澤の山枝と云老  
飯初子兄送りてけしすを従ひ来りあゝの  
風系こころひ思ひつつけしおろし言ふ他意  
かたやゆ今既し別し事そ

物ぞて取引はく余波か

お十丁山小入く永平寺を後し及ん禪師の  
あまなり邦様千里を遊てかゝる山信子流を海  
多し<sup>貴人</sup>山有とや福井の三里ゆおれハ夕  
飯志こめて出るふ黄昏の路たらくと愛よ  
等載とらよ古き隠士ありいつれの年ふの江戸  
ふ来りて平を尋を十とせりまうといふふ志  
さう不ひと有ふや将死なるあやと人平尋  
侍れいさく存命してそこくとおぬ市中  
むそふ引入る怪しのお家子夕顔毎ちまの





弱よ多すけりまゝ大垣の屋に入ると昔も伊勢が  
あり合誠人もるを元とて如所の家に入集る  
新川子荊白父の子をかくらん日暮宿ひて  
獲生の考よりうさぎと且喜ひ且いさる詠のりお  
うさぎもさやうはるふとけふ六日よあれは伊勢の  
近宮ゆくと又新平家と

蛤のぬきふりつれり秋を

芭蕉翁文集卷之四

後河原

此度とふけり行して秋は國土をさふさふと  
ゆふかの依はるゝあはれゆふの十八里は  
あはれとすやと候まゝゆふの味を食  
てはさきとすもふんをさふさふと  
あはれとすやと候まゝゆふの味を食  
てはさきとすもふんをさふさふと

芭蕉翁文集卷之四

浪河序

北陸道小浜御所にて越後國出雲崎より小浜  
泊るかの佐渡の島は海の面十八里浪波を信  
東西三十里を横をり外なる峰の吟詠谷の隈  
まてさすふも水は沙のさやふは後よりむ  
世島はころの多し出づ普く世の室とわねは  
おき目出度崎めく侍を大罪無敵の如き流  
せし流しよつと只かそらしと名の交えあも本











さすしをよすを乞王戎み菜の服さうらうと  
戎の一字を摘て嵐戎と名つゝまよらうとくを  
今月のわらうを去る中まもむくまか  
ぬまかかそそくゝ志のらまぢひま  
父のこゝ子はこゝのこゝ是れあへ年  
はひふれむひひる侍乃熱の徒むす白  
くそ花もうまぬし中あう筆をとらて  
おひを遊んこすまかかひぬんま  
と物ふらうと只ままかまかまか

夕のききむらうは

秋風よけかあま菜の杖

鄙歌

自得

かりんちやうりはるるま

花の都もいふりなり

歌者

つと難果を伴よゆて買ん

?

賣人よもあはれありけり

東順傳

老人東順、樓氏ありて、其祖父江別豐田の農  
士、井氏と稱す、樓氏とありて、其父晋子、母方よ  
よる、其父ありて、今年七十歳なり、其の秋の  
月をやめる、花の上は、花の情、あはれ  
ゆる、あはれ、かき、花のな、あはれ、す、井氏あり  
流し、更科の白を、飛ん、て、大業、妙典の

意、年、流、る、あ、かり、て、附、醫、を、学、ん、て、恒、の、産、と、  
本、多、何、業、の、公、より、俸、沙、を、給、り、谷、奥、龍、塵  
の、熱、す、く、あ、り、て、其、れ、も、世、法、を、い、と、ひ、く、名、方、の  
底、を、破、り、折、て、業、を、換、取、よ、六、十、年、の、と、り、め、く  
市、店、を、山、店、よ、か、え、り、其、の、む、ぬ、字、を、と、り、め、  
く、其、れ、を、さ、り、て、十、と、せ、り、あ、り、て、筆、の、中、に、こ  
車、よ、あ、り、て、其、れ、を、さ、り、て、其、れ、を、さ、り、て、其、れ、を、  
流、り、と、り、て、是、必、大、徳、經、市、の、人、あり、

入月の流、其の四隅、く、

栖去舟

爰かこころれあつたて橋町とつふ所よを築く  
晴月衣更忘よあつぬ風雅もよや是とふして口を  
勇んもすれぬ風情物中を此をひて物のちりあ  
や風雅の麿んあつて 粧敷りや栖を去後よ  
只百歩を歩くして杖杖一歩よ命を法ひあ  
ゆきり風情流よ蘇をくらんよ  
さきさきより上よ体よ味りぬ

石臼頌

市中よ省て佐慶よよふぬとすれ 冥よを始を  
よくすつらりもを流をこころる中か  
竹井の権も粧出つらつら元寛平花山の上皇も  
流りきつらあつぬあつて是をえらよ只石臼の  
こころのこま一國あつて是をりて肉牙のま  
法身を知り民家よいあつて麦新初るはようも  
こころあつてあつてを所けり余あつて  
あつてあつてあつてを論すれぬ役優あつて

お中よからぬと彼たゞひを辱しむるの上よ  
立上と下と二つあり力足らざりしは  
よきおれは好く不断止るよ有て是より  
えぬは信よ信よこの酒よあはれや  
若婦のよふとてぬるこの難有るを  
さくらり知るる一國あはれは  
を擔ふ志翁の出来てさくらりとする  
海に奪れぬを悔しかるるを  
すむ盗人のあはれと名詞をぬすむ盗人のあはれ又

人の心をたゞすのこころあはれは  
あるは魚の信よ信よこの酒よあはれは  
むとりの信よ信よ天家ありあはれは  
事を是れ挽きあはれは  
文王の始よつうえあはれは  
むつうとて争の信よ信よかまはれは  
古代のまうとて枝よさるる  
あはれは

西行上人像贊

すてらて、身いあさりたてあとも  
香のふる日

うわこを何の花のゆき日  
うかこをすすす

卒塔婆小町漫

何れきく〜善もさ〜善もさ〜りりり  
人うか〜り〜えんいうけ〜り〜家〜り〜えん

千桑のすほろ〜今家子眠すそのかちちる  
時ハ魂もま〜家〜あ〜ん善もさ〜り〜  
善もさ〜

多〜り〜や〜香〜る〜ぬ日〜善〜り〜

梓折賛

こは梓の折と名付るものの上つ〜よめて  
あひ目出多き枝葉の奇おとあけきゆつ  
の山より生れ〜何れの里に續りてん

あつそやむりい横植あり今ハ花入とゆて  
まへ人改上の具平一名を改といえり人ま  
かくのこし言ふ居る騎之くは早よ有  
てうもむくは只世の中ハ横植あり

この横植むり横の

横植あり

句合跋

一柳軒不卜のぬい景を花境に伝ひとぬ  
もそをこし一を井る山の岩のを多とり  
あつそやむりい横植あり今ハ花入とゆて  
まへ人改上の具平一名を改といえり人ま  
かくのこし言ふ居る騎之くは早よ有  
てうもむくは只世の中ハ横植あり

ろくじつ様を志けき梅子入るむの香はこよ  
きふつと色とふゆの葉を拾ひてたたく  
つらちを積りて四季とある判士よきまよきて  
家をその一よ従ふ実や樂子あつてりけり  
笛をぬすむよ似るうとらんさこともき響の  
目をぬひ弱指の口を戸さんと能す身享  
舟のと〜筆を江戸の湖よそれてつら  
芭蕉居の言はあ乃燈火よ對す

白合歌

一<sup>中</sup> 諸禮停止

一 出合遠近

但や先

一一句一直

雪月花一句

右三ヶ條舊式也

芭蕉黄桃青書之中



出社記柔の戒染よそものを用も碎るを  
帰んでありし海子きほるの訓ありつゝや

一 和沙茶代 子すうしん

一 化の短をあけこり長を短し事かうれ人を  
そらして己よかこるは甚妙き事と

一 雑語の外雑語すゝゝの雑話出ある居眠  
して骨をきかした

一 女性の仇あよ志しむゝの師少も才子も  
いぬことありけきよ親交せ人をもりて侍り

了了想て男女のそは詞をさるのこあり信  
蕩すれは心致一あはれと一を適りしてあや  
能己を省了

一 三つりのの二針一葉きりとも居くは山川  
江澤ももさあり勤しや

一 山川舊跡あつゝ尋入了あつゝ私の  
名を付ことかうれ

一 一字の師恩いふも忘る事かうれ一句の  
理をいふ海せ人の沙とあつゝささる人よ

一 宿一飯のこともあらずふらふらうらうらやとそ  
 媚福事ふくれぬけの人の世は奴ありはなま  
 入る人の心なまふらうら  
 一夕を思ひ具をおりて一息のけり神とふ  
 一 一いぬるるる人よ昔をかゝるこふれあ  
 くすれい味せしむの云をあらうら  
 一 舎式兼合兼業ありふまかせよほれよ及と  
 ふくれ  
 芭蕉庵 下

吊初秋七日雨早文

元禄六月七日の夜風をよよとち白浪浪河  
 の音をむらうらと鳥鶺も梧杭を流し一葉梶を  
 吹折る氣色二星も危形を先ふらうら今宵程  
 只よとさんも沙多のうら一燈うけ流るらうら  
 遍昭小町の奇を吟する人あり是ふようら  
 け二そを採る雨早の心をかくとさんよ

小町う奇

言水よ早も磁床や岩の上 翁

遍昭々奇

七夕よかきういう〜清合羽 松風

再出 白髪吟 前文と見せし

便も舟月の玉すのり武陵より古渚一海のこ  
二十と歩の日はも羨おねや北堂の萱草も  
お花も今いそけ付ふさう〜の行事もむ  
うよよかきう〜からの繁お〜眉志〜と  
つねおと今ありとけいひ出る〜葉もなまよ

六はくこの古袋を解て母の白髪おうあよ浦嶋り  
子の玉子箱ぬる眉もせゝさうり年月の意りい  
か〜よはに〜

一家こみ枝よ志〜巻束〜

縮風絃子号

風絃ハ琴リよあ〜の瑟よわ〜を弾子丸を刺し  
根を〜して〜て萩の穂を能く潤〜角微あまの  
ちる〜かち〜





末伊師の山中子ある程父母のいすをかりとんと  
慈愛はむりもあしくありしやのそあやう  
ありて

古郷や胸の法よふ年の言

とやこふさうといふ家のむらの言の  
うきたぐも神をかしたてのあらぬ  
そ何れや旅人

旅人よ家名をきんづいてくれ

湖水の波を運出する田螺つたき芦るの解をよそ  
みをおそれよ牛も馬も皆さすまふうれ

程波はや田螺の言よあはれ

骸骨画賛

本間主馬う宅よ骸骨しりけ笛靴はかぬえと  
能すり処を画す津臺の壁よかけらう詩を  
中糸の多りつれあといけ抱ひよこふらんや  
かの翳儀を枕して流よ夏沢をわらうとも





めて悪の手柄よはなりの

その附句

蒜の餅よききをさうあそ

きの居る花の袂危とよありけり

二月十六日

とて

本因縁

返書

美蝶おん或人の附句も又いふ事なき

信々悪評も又いふ事なき平程序も居る事なき

心算なき及返をりたらし友なきは其業も

古事つねお求りけ切し京中一定の人

信々も又いふ事なき求をり何しのあやりの

い探集も志も又いふ事なき探集も

つらもていふ事なき探集もいふ事なき

信々

いふ事なき

菜菔集

巻七

春仇送歌

蒜の餅のよきききの居るを誣めたりと



さう増てきふ書を附てつわ列せを附分け  
當時未朱の他者子げ句を仙とさひは流と朱  
未朱一句の拾ひの時の秋風集て道徳の  
家ららく破れんとの一旬一十これめと為中  
よふと書てうち書言くかこめを府のめらう  
羽さしたするやうふおほえん

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*





